

美濃奇観

三浦千春著 下

ル 4
4590
2



門ル
號 4590
卷 2

美濃奇觀卷下

美濃 三浦千春著

養老龍 田跡山



乃龍ハ美濃國多藝郡 養老寺の縁起及謠曲に本巢郡といへ

の地本巢郡に 白石村乃奥なる山中より出づる

跡山あり今古俗養老山と稱せしが白石村ハ美濃

大垣驛ノ東南二里半に高田 タカダ 多藝郡島 田村の内 市街あり

其河より三拾町より未だ方に入らざる山村あり 人家九十六戸

とれハ瀑布より流れて山沿十町ありてい同道より

美濃奇觀

早稲田 大学 図書館
34.11.2
蔵書

一く行に随く目も草木ありて巖と云や一に立つ
 形も山れたる水乃流世も似るつらふく流のひくさ
 松何小和くきく聞えは心もきみ初る松たはるを
 仙境に乃流くかしく仙乃は岩清らうにて苔封し
 落すわくく風衣と云は流乃志ききと面はわくく
 夏れ日けうききき肌小きゆりきき一は足りけうきき
 合りけうききに銀僕アムカハときけうけうききにてたち
 小落くくハ布と云はけうきき岩にくたきくゆきき
 玉とみくきき又時と云はハ缸と記してて景と筆も

養走山之圖

天台女仙桃源洞仙甬時不為作其山圖其人一別
 渺茫雲霧埋路内雖思而不能復招外館暮而
 無由再入惆悵附之夢境何其愚也此同者養走
 仙境信之行者也菊水雖深瀑布鐘高案此亦
 之十出十入百往百來意不如意天台桃源聞之如
 悔其智不出於此世人不預求仙境則已苟欲
 延年合此集之

尾張 秦鼎撰



中納言家持
 田原河内此と傳ふるついで
 文治のころそと藤原のよき



美濃奇観

四〇



詞に畫をへるにあつと瀑布は高さ直下九丈あり其幅
 九尺なり絶壁の上より流をたら下はた一枚の岩に
 して淵をふく 他國の瀑布の龍壺といふより
 てり立つこと大に異なり さきつりけりく
 落來れ水れつりけりけり人の膝の上を過るるたぬとく
 乃下に入るるは湯をて奇なりつり其水きききて清潔
 甘美にしてこれと飲之ち後小浴多に法れ病と治すれ
 驗あり昔よりつり傳へ古説ありこれと秘して老人乃りつり
 水とよきききにたりしむる美泉にききあり今 明治十
 一年
 と距るる一千百六十二年乃前元正天皇れ代り美泉とて

發見たることを聞しりて靈龜三年九月おれ所
 以幸ましくその水と手手に持てけり病を治し又所疾
 痛と瘰癧たる人ハ所痛處らみり愈て其去けり 一七九
 年
 うりうりつり大所心につりありて子孫多にりりて
 遷幸れ後同しれ十一月詔して此美泉乃りりたる事
 大瑞小令とて以て年號と卷考 符瑞書曰醴泉者美泉可以卷
 老蓋水之精也この語より
 物となり又美濃國守及當耆郡司等に位一階と授け
 へゆ本郡來年乃調庸餘郡れ庸と復り百官れ人おと

て文雅乃士杖と成りては社より名を述ぐる所國
人をも高くまじり賞を蒙り山中櫻楓多きを以て春秋の
あつたる所なりと夏ハうづりては花の青
葉の蔭に安んずる人との教を志すは伏し小三伏の日に
に來りて暑氣をうけ病と云ふはゆゑなり仙洞小可
のすゝいと水と云ふ

美濃國古蹟考に夏日遠近來而觸龍者如帝謂愈頭
痛然水勢剛大質弱者當之不堪云云とあり今
婦人を此と云ふは多し壯なる男子は此毒小

養老紀に名はくは元正帝の
内時田山と始く美泉に發見たり符瑞書の語
に及んで年号と云ふ者も改められしを以て世に
稱へて養老の紀といふなり是れは神代卷に
たりし美泉に及んで年号を改められ又も年號を改め
りて貞和といふもその例稀なりはしむるに
也世表大寺に縁起に雄略天皇乃内代美濃國本巢郡
源内といふ所のありて母に孝ありて天感ありて禮泉

事父至孝家貧無財鬻薪自供其父嗜酒樵夫常
 提瓠過市賒酒以進一日採樵于山踐石誤仆覺
 傍有酒氣心怪之回顧左右石間水湧其色似酒
 試嘗之則馨烈甘美樵夫大喜及而供父靈龜三
 年九月元正帝幸美濃車駕過當耆郡觀醴泉以
 為孝感之所致名泉為養老瀑因改元養老授樵
 夫官家致富饒按續日本紀養老元年詔文盛稱醴泉愈疾之功無孝感事今從十訓鈔古今著聞集
 ○多藝行宮址カミヤ多藝郡白石村字アノイノ行在所也此地にあり
田跡山即養老山乃養老也今反其所以神社ありて多藝行宮社

こゝに神社一河原方拜殿二河原方元正天皇公奉紀十例祭
 七月廿五日に八里人等神輿を昇りて古行幸此京状を
 表す此以て式々を修りて今子歳と稱せしむ遠と述ホキ以
 舊フルキと云ふは行幸の辰乃向の寫と云ふは性昔元正天皇靈
 龜三年美濃公乃行幸八始不破行宮不破郡野上村に傳りて行幸
 こと九月十八日甲寅より翌十九日乙卯より二日にて同廿日丙辰
 多藝郡上野原より同廿七日癸亥より八日同多藝郡行幸の所
 より行幸後去老二年に二月七日壬申河原段草にて美濃
 公乃醴泉に行幸尾張伊賀伊勢等八國公行幸三月二日

戊戌宮に還るる時より河舟七百里
美濃國に停御の日數詳あり 此の時又
 行宮乃地ハ前年におりしやつとて此の証と爲る事
 うつて吾友神谷道一曰正史に醜泉に幸をせ醜泉の事を主
 記りてなきは此れ多藝の宮に停流ありし事ハ疑なり
 且天平十二年聖武天皇の行幸ハ美濃國に宿駕と停トク
 事十一月廿六日己酉と十二月廿六日戊午につ十日河舟あり
 不破頓宮無井村の南の方に今神所野と稱する地小宮多藝の宮に停流ありし事ハ疑なり
 幸れ内多と正史につ志トク元正天皇乃
 少向之流と養老能ハ行幸ありし事ハ疑なり
 萬葉集卷六

新編美濃國志
 萬葉集卷六

萬葉集卷六 天平十二年庚辰の詔と輯録より
 美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首
 從古人之言來流老人之變若云水曾名爾負龍之瀨

大伴宿禰家持作歌一首
 田跡河之龍乎清美香從古宮仕無多藝乃野之上雨

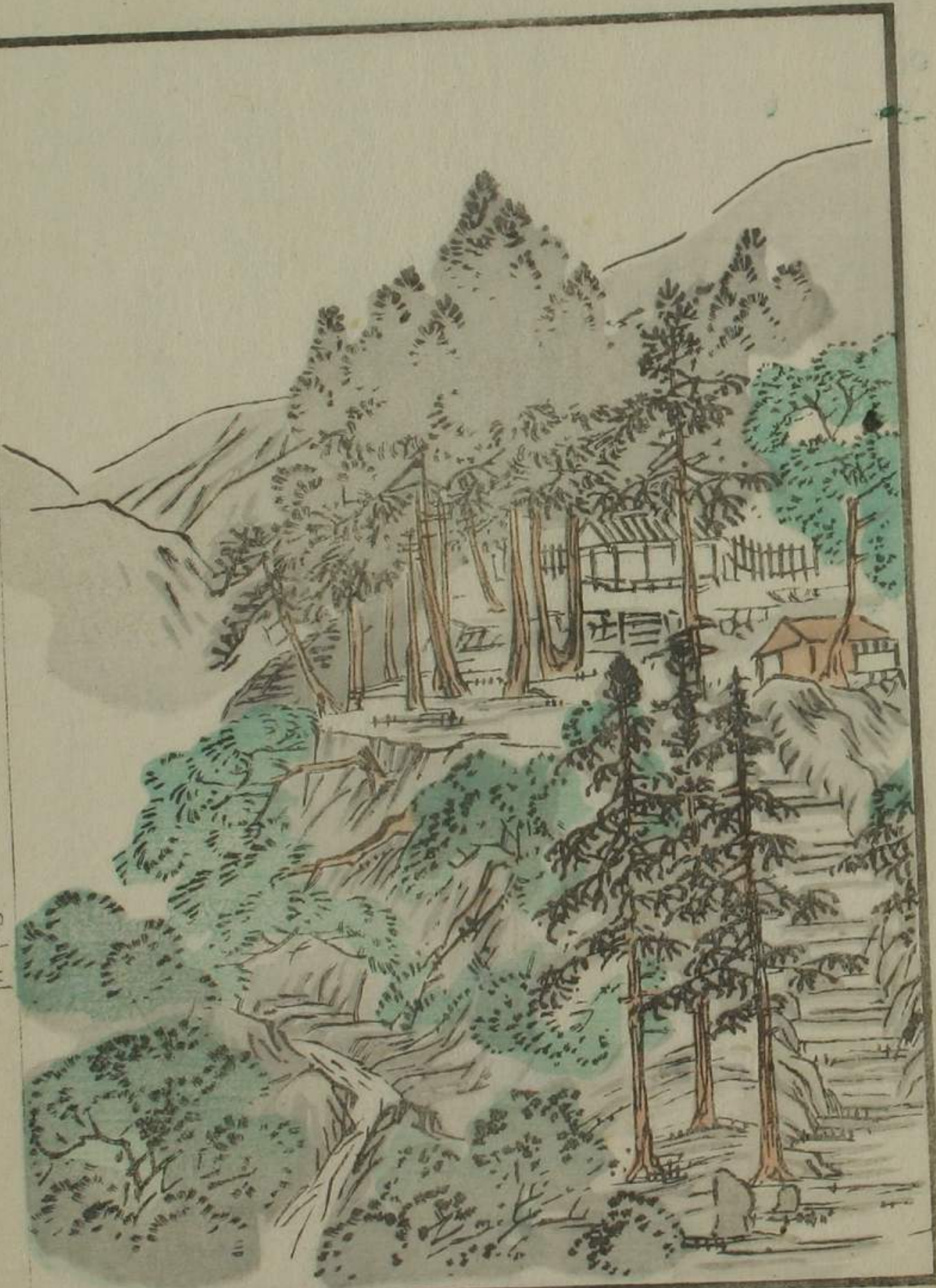
養老能ハ田跡山にありし事ハ疑なり
今ハ田跡川より稱す 田跡山ハ大なる山なり多藝郡石津郡
龍乃下流津屋川と云 龍乃下流津屋川と云
 七乃南の事ハ伴勢國業名歌に連なり

府内を養老美泉辨小美濃人柏岡道尋云美濃乃多彦
より十里の所のやや遠小巖修ふべく伊勢れりて
美濃のこもつてく多彦山とていふあめ山はなすの石
かり今も美濃乃とて多藝山とて六郡のめよりわたりて
こりく多藝乃野之上ルハもれり多彦山乃麓多藝乃
地ありとていへり行宮神社の所を遠あり

○養老神社と俗菊水天神と稱す此乃もこり四町より
東乃山腹石階と上り小湊にあり美濃神名記に多藝郡從四
位上養老明神とていへり此乃祭神詳ありいれ神社の

境内に菊水と稱す此泉あり社にわたり乃岩より湧きて
夏の日も程のりいと涼く澄みたり清き水あり
乃岩やなく世に稀あり水あり
周圍に石を疊して水を湛一層
こ縦横各貳丈餘りて底淺
流て山下に到る芭蕉菊水の句にしせよりすの齒に
ひくはれりつるこみ泉のつらさそとく形容す
こりぬるぬあしくのり號作やまてて古書に不見ふ
養老の謡曲天正中れは本に菊水とて事いふたれはこり
既といへりやとていれり按ては小風俗通に南陽鄴縣
有甘谷谷中水甘美上有大菊落水從山流下得其滋液谷中
人家飲此水上壽百二三十其中百餘歳云云又荆洲記小鄴縣北

○美濃奇觀



〇十三

養老神社圖



有菊水其涯芳菊被岸水甚甘馨胡廣又患風羸飲此疾
 遂瘳ニダふやそを思ふく昔もろくに菊水を汲て疾と瘳
 且長壽を得しと世に名を以て故事なりといふと
 て近古好事者此唱初ナ初め初めと曾くは邊ホに菊花
 ありし地は此のりなまをてくと山深く森々たる林下な
 り昔も今も菊乃花ありて可なり此の南陽縣の菊
 水にるまゝくだる必称ふ好事詠ふ養老の謡曲に詠
 り菊の水志すこれ落乃養上仙徳とけしり七百歳と經る
 ちとち薬乃水とて物なふとありてはもと又泉と

養老美泉辨に委しと一也これ今省すぬ

○養老寺ハ龍壽山元正院也稱一真宗東派なりこの寺
 性古は天台宗ありて不動佛と傳來勢しつ改宗乃て此
 別堂と建しつ後以安置を即り乃不動堂なり也本堂
ハて南の一説其の不動堂ハ以て本堂那チニッ生律材不在
方にあり一説其の不動堂ハ以て本堂那チニッ生律材不在
 那チニッ生律材不在
 後古書しつ後多勢郡小属勢也つと記すもその
 後人附會せられた天正年

土俗傳へて此龍
 に浴せし人鱗魚と
 不動尊のまじり
 地とすま村と
 附會せし説あり

中豊臣太閤連歿所紀巴と此地の學僧に令しく謡曲百
 番の注釋と依りて其の中形を古老の伝承
 を石津郡高須に領主徳永法下壽昌中にて尚書に
 寄附せしむるに依りて寺寶として其後慶長十二年未
 乃秋法下堂宇坊舎を再建し寺前五株の松とあり
 今徳永松也秘をゆゑ其法なりといふ寺乃北なる小山と舟
 岡山とあり

○千歳樓ハ春老寺より山に登りて此山町とあり
 瀑布と距
 五七町余小
 一東西二十七八丈南北十六丈との形乃平地なりとあり

向ては廣く川海なる橋ありては昔老れ山ありて人
 と憩ふ所又宿をせしむるけし家にも明和のころ
 岡本喜十郎やいふ人始くあまは建たりて昔より
 浴室と設き能乃流石汲み湯ありて人母浴をせしむ
 今はそれ事絶つて湯れ山の稱ハ存在ありて櫻
 乃木多し花ありてハ形掃き雪を埋るゝ動も形ありて
 ありては庭をけしき三方目にさける物ありて打されて美濃
 乃國內ハ更なる東の方尾張三河の山と望み南々伊勢に
 海初めの浦うけく遠上二眸乃下にけりたり



人の形は似ては家もつゝはさびたるるれき夏のころは山中
のりし派も〜とき所は少し所は前より出る萬葉集も大伴
東人大伴家持の字を彫たる碑たたり

○筭^{ミヤウ}嶽^{ツク}ハ養老龍乃西北き里所はつゝ高く秀る峯あり
又より北東半里所ありて巨大な巖石あり俗に〜と云ふ巖
こゝの岩上平らうに〜多ふ十人を座せ〜を〜に〜を
壯觀の地眺〜に眺〜ら又養老龍より北二十町餘柏尾^{カヒラ}
村の山中に瀑布あり^{ミヤ}稜^{シヤ}龍こゝは甚大なる穴あり〜を〜
く早と分けて水清々變り〜れく風景愛も〜惜し〜

山沿〜に險阻あり〜た処〜と持〜と得と故ふけ記たる
〜に〜人稀なり

○文政年中表者山下に百歳翁あり姓ハ井口名ハ仙四見
壽山と號も多藝郡高田里の人なり稟性^{ウニレツキ}も〜知〜に雲
てま〜く^{サガ}仕^サあり多養老の嶮山を杖〜よ〜て杖と登り
〜又中憲のり〜細字紙写す遠近あまを傳へて仙
翁〜其人を尋ねて書と求む〜の多〜文政丙戌年
八月百一歳あり〜物故も〜詐胤五六十人あり〜ゆ〜其
百歳む〜年ハ春養老山の千歳樓に大に宴會を用〜

四方れ文人雅客の請し書畫詩歌を展觀し又席かき
 ぶとそきし其附の子孫曾孫のついでにまふと
 孫の女児八歳に書を作し此翁常く去夫
 を所て仙山やついでに山やその壽をたえて其實し
 仙境のついでに空のついでにあり

壬午仲春詠古風一首贈養老山下百歳翁壽山因秦士
 鉉之囑也 鈴木 服
 伊迦仁志底和禮茂阿曳奈年多具比那伎與能奈賀比等
 乃美努邇安理登布

按もろに文政壬午ハ壽山九十七の歳なり然かに百歳翁やまろものハ
 この翁九十六歳のころより自稱して百歳翁といつにふれなるなり

○養老山碑七基

温泉詩歌碑 美濃押越 樋口道順 銘

養老泉碑銘 和哥碑陰記

備藩侍讀 近藤篤 識

吳超 程赤城 書

七十九翁 墨川 記

和文碑陰記

紀藩 川合衡 賦

七言古體碑

七言律詩碑

江戸

關其寧書

美濃栗笠

佐藤宣衡記

濃州笠松令

龍川惟一題

江戸

詩佛大窪行書

瀑布七絕詩碑

江戸

董堂中井敬義併書

美濃人

當當利茂
米齊松菴
橘堂松石

菊水銘

碑陰記トモニ基

月所菊泉

尾張儒臣

秦昂撰

姑蘓

稼圃江大耒書

姑蘓

芸閣江大楨記

當湖

品三陸如金書

尾張城下

服部正直
全建

美濃今尾

水谷直方

○卷老此碑又又詩詠とつそつ摘出てありと

濃州養老泉碑銘

備藩侍讀近藤篤識

元正御極王道平々問民疾苦閔物則天當耆之配
多度之山天降嘉瑞地出奇泉清潔可食養而不窮
人受其福王明之功一飲一浴不老不死衰耄再盛
癯瘠可起有本如是万古混々君子是取監戒堪存
陵谷變遷湮晦是懼於是建碑以識其所

乾隆五十年歲次乙巳正月吉且吳超程赤城書

乾隆五十年八月天明五年より程赤城ハ浙江の乍浦よりこの人
あつたのち年々長崎へ来る高估なりとて西遊談よりなり

多度山高跨二州飛泉百尺劈崖流一條縞練懸如

曬石點明珠碎不收曾為先王療痼疾又教孝子解
窮愁喜我衰境受恩厚千里來為養老遊

濃州笠松令瀧川惟一題

文化九年壬申夏瀧令寄似此詩予為書之使其刻石

庶幾長與此山不朽乎 詩佛老人大窪行書

養老瀑布詩

梁川緯

養老改元光史編至今百丈瀑泉懸寒風珠玉噴為
兩白日雷霆轟在天

恩田仲任

山勢崢嶸插碧空懸泉一道彩雲中君王當日留鑿
駕海內皆知養老功

岡田挺之

懸泉百丈映巖分佳境驚看勝所聞自有英靈鐘孝
子應知至性感明君風潭六月吹晴雪石壁千年曳
斷雲不獨甘香能養老洗纓吾欲避塵紛

河村益根

養老靈泉感昔時至今甘冽世人知程生筆蹟滕生
頌準擬寒山一片碑

江馬之恭

養老之年養老山山頭飛瀑白雲間定知銀漢溢分
水却恠身從廬嶽還

秦世壽

曾開嘉瑞迎宸駕又獻慈親變老顏寄言天下人臣
子須帶艷尊來此山

靈龜帝行宮古跡

梁川緯

澗邊芳草瑤簪挺巖畔鳴泉玉珮分曾是六龍巡幸
地滿山佳氣尚氤氳

千歳樓作

登々莽武元之自

西邊巖峙一條瀑布人斟千歳養老酒東畔地平百

尺飛樓窓看八州接空山

此樓上より越前如賀飛騨信濃甲斐三河尾張伊勢の國々を望むべし

建長七年顯朝卿家千首寺に故郷

權少僧都玄覺

夫木抄

美濃乃らふたふ野れうに官お坊しあはるるて此を吟むる

みのふ乃奇枕の品所

一條禪閣兼良公

藤川記

つらき山見ればさき山麓の水老成をうまひなかりわたり

去老成

風早實積卿

類題和歌集

みき老成のさき山麓に菊のさき花のえはれ見せ

山麓の老とやあはれさき山麓のさき花のえはれ見せ

名所誌

村田春海

草野集

久きみれ代乃あはれさき山麓のさき花のえはれ見せ

昔老成乃さき山麓のさき花のえはれ見せ

たけなまさき山麓のさき花のえはれ見せ

つらき人のさき山麓のさき花のえはれ見せ
小澤蘆庵

六帖詠草

おほ君れさき山麓のさき花のえはれ見せ

柏樹のさき山麓のさき花のえはれ見せ

美濃奇観

本居宣長

養老廟

芝山持豊卿

田沼川の氷はゆり空と早ひうてあつたにやうに流のうへに
りま人をまゝ考れ千世のうへに流のうへにたのむるうへに

富士谷御杖

題名

田中道麻呂

田沼川舟おらうる能乃下の留れお里のほらう吹雪をやはし
老人を御しうまうれ春にらひあふまのうへに流のうへに所やうに
養老能の傍うへにうへにうへにうへにうへに
本居大平

水上はら流をまらぬき能つせをら愛老人をわらゆらあは

養老の御杖

千種有功卿

道去らぬゆらあはれをら多なれたる今も其の氷をうへに

松平義建 高須少将

のを思ふれ起てうへにゆらうせうへにうへにうへにうへに

度會弘訓

なるもくはせうもらうへにうへにうへにうへにうへに

加茂季鷹

うへにゆらうへにうへにうへにうへにうへにうへに

まいしや南の川にうらうらして大層言のりなかくて水をも
 のろそ母人の白髪もあはれにうらうらやうらうらとついでに
 まはるかにのりだにひいそはぬかふちをえついでに
 水のうらうらとついでに多葉のうらうらとついでに老人
 けろつゆらの水病れし中ふまゝと語らうらうらとついでに
 白髪のをうらうらとついでに山あいの池のうらうらとついでに
 月うらうらとついでに水田は山乃池のうらうらとついでに
 ○飛浮人田中大秀の古老の龍女ふりうらうらとついでに
 可れきりばまはれりうらうらとついでにうらうらとついでに

たもつぬ今とて舟を乃要をうらうらとついでに
 十の月月雨のうらうらとついでにうらうらとついでに
 けろつゆらの水病れし中ふまゝと語らうらうらとついでに
 てまのうらうらとついでにうらうらとついでに
 けろつゆらの水病れし中ふまゝと語らうらうらとついでに
 村とついでにうらうらとついでにうらうらとついでに
 こなるうらうらとついでにうらうらとついでに
 て白石村なり中村をうらうらとついでにうらうらとついでに
 ついでにうらうらとついでにうらうらとついでに

千春云是
 千歳樓か

口つて人々俗をせざる事とて一免たりと人申はひ
借りてわらあつたなり屋の廣くうらうらり入て行
かきのくひは休むこと繁んたる所なりきりて
るく世より北に伊吹の峯高く東に横山は
あつて山脈をなすなりきりて山脈をなすなり
たすは中にわたりて山脈をなすなりきりて
山脈をなすなりきりて山脈をなすなりきりて
くりりて水谷のありは山脈をなすなりきりて
さうして山中ふりて山脈をなすなりきりて

くもくぬ栗中島海西ありて山脈をなすなりきりて
あつて屋敷の國より南の方へ山脈をなすなりきりて
うらみなりきりて山脈をなすなりきりて
くりりて山脈をなすなりきりて山脈をなすなりきりて
あつて屋敷の國より南の方へ山脈をなすなりきりて
くりりて山脈をなすなりきりて山脈をなすなりきりて
さうして山中ふりて山脈をなすなりきりて
くりりて山脈をなすなりきりて山脈をなすなりきりて
あつて屋敷の國より南の方へ山脈をなすなりきりて
くりりて山脈をなすなりきりて山脈をなすなりきりて
さうして山中ふりて山脈をなすなりきりて

美濃 奇観
とらふてのふし梅しるを池乃もあつて
く霧さうくは使らあつてさうぢらうさうの益りく
池の何れをふまゝおて海にうらりさういふふふふ
今をてのけ乃さうさう時あつてふふふふふふふ
世にあつてさうさう君とこの山祇も持らういふふふ
ゆゑさうさう或人のさうさう
みあつて君さうさう池のせれあつてさうさうさうさう
程あつてさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のまらうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
神社

たらしゆつて傍に清水乃傳ゆるをさうさうさうさう
はる度さうさうを横を二丈あつてさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
回さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
水は美泉さうさうさうさうさうさうさうさうさう
海のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
跡取さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

嘗初くそ乃のひり道乃傍の杉蔭より清くこ
のりてたらくしむをき田れをくはつ

○苜蓿ヒツキ古者漢小産をれを物と次音動是つる事
保れらる巻老のなのをれ芥とまうれハ林丘寺玄瑤御哥光

内親王ハ後水尾天皇御文法諱照山元瑤禪尼ハ天皇崩御の後禪髮
して浄業を修しう北叡山雲母坂下ハ林丘寺ハ開山して賢女ハ譽ハり

根を中ヒツキはじこれやるむ勢乃たのみを巻老と書きたされはる

○垣衣石ヒツキ古者此山中より出質ハ大ヒツキ様石わくくみく又巻老

ハ大まね石とくわめてまね石片ハ皆紋理ありてわ

ち俗ハまのぶとく草に似る故もて石れ名ハ次巻老此石の

垣衣石圖

たやの山

うまの山

あぐんき

ひう志の山

石下り

子巻



附て云養老乃古詔をば御く、聖女に於ては、
 遠道より着せし人常ふたふ、今、外國の人、其の
 て、尋ねる世を、
 公園地、
 五千人、
 美濃奇觀卷下 終

明治十二年十二月五日版權免許
 同 十三年九月 出版



著者

岐阜縣美濃國武儀郡小瀬村
 岐阜縣士族
 三浦千春

出版人

同縣同國岐阜末廣町
 同縣平民
 三浦饒三郎

發行所

岐阜鞆屋町
 水谷善七
 同 米屋町
 三浦源



